戦争の悲惨さと私の青春時代の思い出

福島銀子
沼袋一丁目

現在、五五歳以上の人なら、みんなそれぞれが、何らかの形で戦争と敗戦を体験していることでしょう。戦争をまったく知らず、お金さえ出せば何でも買えるという時代に育った若者達に、ちょっと耳を貸していただきたく、文章を書きました。

私は当時二〇歳の娘盛りで、教養を身に付けたいと、華道やお茶などを習っていました。戦争がひどくなるにつれて食糧難になって、女性は誰もがモンペ姿になり、学生達は在学中に学徒兵として召集され、あるいは勤労動員で軍需工場に連れだされ、または女子勤労挺身隊にとられました。

太平洋戦争が激しくなり、国民学校低学年は昭和十九年六月より学校単位で集団疎開をするようになりました。私も当時、自分から区役所に行き、疎開地の保母として勤務を申し込み、兵隊さんが出征するみたいに町会の人達にお餞別をいただき、送られました。母は食糧がない中でご馳走してくれました。

私の担当は神田岩本町にある千桜国民学校低学年の三年生で、全員で四八名でした。現地には先生二名、保母二名、炊事婦の二名が行くことになり、母と子で悲しい別れをし、上野駅を出発して埼玉県南埼玉郡の興善寺というお寺に行きました。

見知らぬ土地で寂しかったことを思い出すと、今でも涙が出ます。子供達にとっては見知らぬ田舎の土地なので、足が地に着かなかったと思います。十歳にもならぬ子供達。毎晩泣く思いでした。私自身も胸の内で寂しさをこらえて毎日眠れませんでした。毎日貧しい食事に耐え、お互いに頑張りました。

月に一回は両親の面会がありましたが、親の来ない子供達もいました。親が持参したお菓子は全部先生に出して、みんなで少しずつ分けて食べました。親たちが夕方に帰る姿を見て、お互いに血の流れる思いでした。その夜はお互いに泣きじゃくって大変です。無理もないのです。また、保母の仕事も大変でした。夜中に子供の具合が悪く熱でもあれば、私が背中におぶり自転車で半里以上も離れた病院まで連れて行きます。行く途中はほとんどがお墓でした。夜中の二時過ぎに連れて行った時が一番こわい思いをしました。自転車の荷台の上で子供達は「先

生こわいよ」と私にしがみついたので、自転車ごと畠のなかに飛び込んだこともありました。当時私も若かったから辛抱出来たのでしょう。

毎朝五時におきて朝食の支度をしました。外は真っ暗です。子供達を六時に起こして三〇枚の布団を全員で床上げしますが、それがまた大仕事です。六時半からは毎朝お寺の住職さんのいる本堂で朝のお題目のお勤めをしましたが、寒い時でも板の間だったので子供達はかわいそうでした。終わると手を合わせ食事になります。限られた時間で食べる忙しさ。そのあとすぐ、馴れない道を登校です。靴下もはかされず、登校する姿を見送った時は涙を流さずにはいられませんでした。子供が出かけたあと、一息つく間もなく、一日の仕事が始まります。部屋の掃除、草むしり、夜は一日おきに子供達を十人ずつに分けて風呂に入れました。子供達の体と髪を洗うのは大仕事でしたが、子供達にとっては一番楽しい時間で、みんなではしゃぐので私は汗だくだくになりました。

翌日は四八枚の下着とパンツ全部を二人の保母が手で洗いました。洗濯機もなく、手はしもやけやひびで痛み、自分の手を見て泣きました。

夕食後は一時間子供と話し合いをした後で、親たちに手紙を書いたり、子供達の着物のほころびを縫ったりしました。また、一週間に一回は、先生と保母と住職さんとで仕事の話し合いもしました。子供達が学校に出かけている時に半月に一度、疎開している子供に対して食糧の配給があり、保母二人で半里以上離れている役場または農協までいただきに行きました。お米、野菜、お芋、その他重い品ばかり、二人で後押しをお互いにして大八車を引きましたが、車が思うように動かず、足をさすりながら、娘盛りがなんのこともない農家のおばさんです。夕方近くになりますと夕食の支度もしなければなりませんでしたが、お寺の廻りに風と人魂が流れて気持ちがあせって体が動きませんでした。でも、子供達の元気な声を聞くと、私も元気になりました。夜は一番いやでした。外を見ればお墓ばっかり、夜中に子供をお便所に連れ出すのもこわい仕事でした。こうしたことに鍛えられて気が強くなりました。子供達も田舎の子にいじめられたことなど、色々と思い出を残したことでしょう。

東京もだんだん空襲がひどくなり、神田の私の家も昭和二〇年二月二五日に全焼しました。大雪の降る日に上空を飛ぶB29から爆弾を落とされて、焼け出されたのです。そのあと三月十日に東京大空襲がありました。子供の親たちも十八名亡くなりました。面会にも来なくなり、子供達に事実を話すこともできませんでした。田舎もだんだん空襲がひどくなり、夜中にもサイレンが鳴るので、その都度子供達に頭巾をかぶせ竹やぶに一緒に逃げました。子供達は「こわいよ」と私の腰の廻りにしがみつきました。その時、東京の空は真っ赤でした。子供達には

見せたくなかった思い出です。それからは毎日こわく、おびえていました。二度と思い出したくありません。

八月十五日のお昼に、ＮＨＫラジオ放送で重大ニュースがありました。天皇陛下みずからのお声でしたが、無条件降伏ということは理解できませんでした。その後、東京から現地の疎開生徒達に対し、帰京の計画が発表され、十月十日より第一陣、第二陣と帰京が始まりました。一年足らずの共同生活でしたが、子供達との別れがつらく、寂しい思いをしました。中には肉親の人、親戚の人が迎えに来ない子がいて、私たちはそうした子供達とともに居残って冬を越しました。寒い冬をいま思い出すとよく頑張ったと思います。

現在、子供達も元気でいれば、五八歳ぐらいになり、良き母や良き妻となり幸せな生活をして、自分達の子供に当時の思い出話を語っていることでしょう。

今回、終戦と敗戦が重なった私の思い出が、少しでも生きた歴史になるかと思い、筆を取らせていただきました。現在は良い時代になり、当時の苦しかった生活も良い思い出になりました。いま一度、子供達にも会いたい思いです。この戦争体験は私の青春時代の思い出です。